[Ⅶ]「やまぐちの豊かな流域づくり構想」の取組み（山口県）

■ 取組みの概要・背景

椹野川は山口市の市街地を流れ、周防灘の山口湾に注ぐ県内 4 番目の河川である。河口には日本の湿地 500 にも選ばれる広大な干潟が広がっているが、生活排水対策の遅れやカキ殻の堆積により、平成 3 年以降アサリが獲れなくなるなどの影響が出ている。

県政運営の指針を示した『やまぐち未来デザイン 21』（平成 10 年）を受けて、山口県では、上流の森林から下流の干潟や海に至るまでの流域全体を捉えて、住民、事業者、関係行政機関等が協働・連携しながら、「やまぐち方式」として地域の実情に応じた特色のある流域づくりを進めるため、平成 15 年に「やまぐちの豊かな流域づくり構想（椹野川モデル）」を策定した。構想にもとづき、山口県では流域全体を連携させた取組みを推進し、平成 21 年に約 20 年ぶりにアサリを収獲するなどの成果を達成している。

■ この取組みで行われた総合的沿岸域管理

・ 豊かな漁場形成に役立つ広葉樹等の植林や森林づくり県民税を活用した森林の再生整備、流域市町による生活排水対策などの流域圏の非常に幅広い取組みが、下流の山口湾の干潟・藻場の自然再生の取組み等と連携して推進されている。また、地域通貨活用によるボランティア活動の支援などの、流域全体に係る取組みが並行して行われ、地域に密着した持続可能な豊かな流域づくりが展開されている。
・ 構想では、「環境」「食と緑」「川」「水産」等の県の部署を横断する幅広い既存プラン・計画も踏まえ、県・関係市町村・住民・事業者・各種団体・大学等の流域に係る全ての主体が協働・連携した取組みの推進を目指している。例えば、下流域では合計 56 名の多様な参加者による「椹野川河口域・干潟自然再生協議会」が中心となり、地元の自然保護団体や漁協と連携した順応的管理が推進されている。

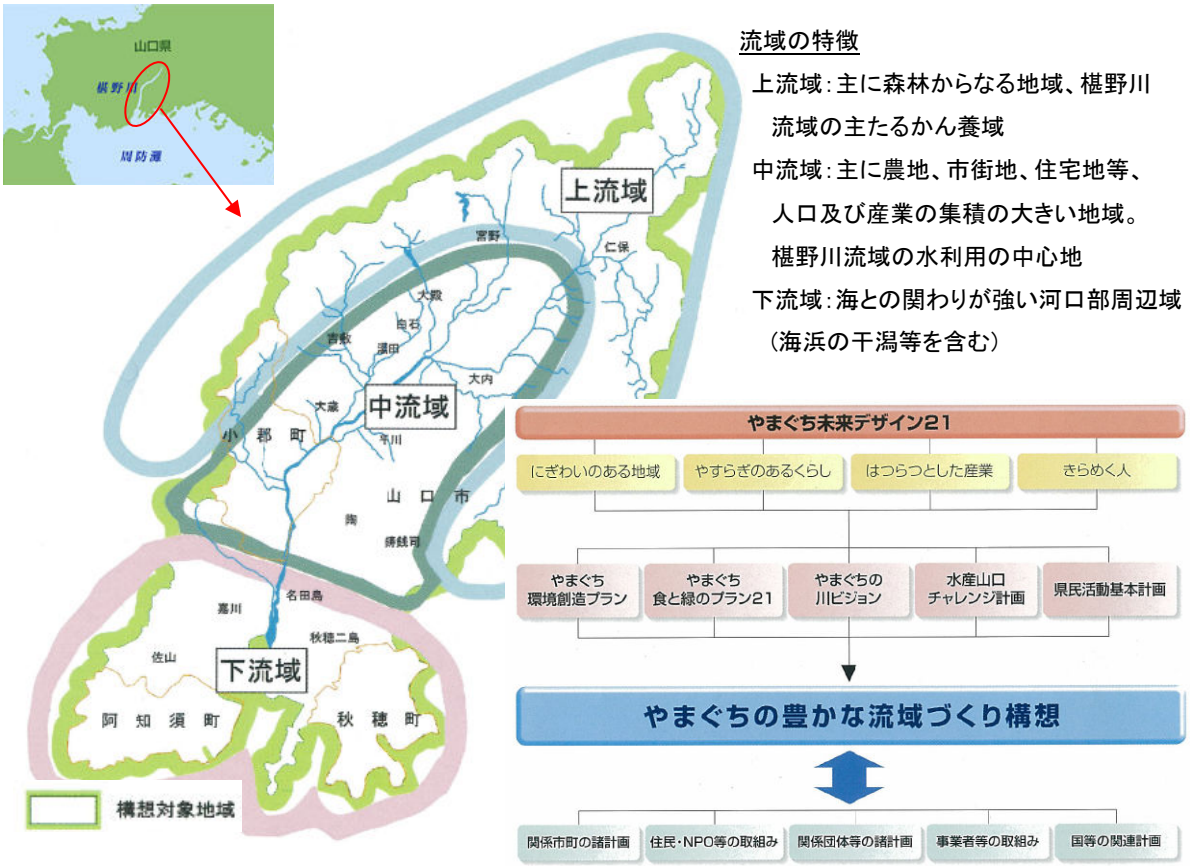
■ 成功のポイント

県庁内の連携のもとで「やまぐちの豊かな流域づくり構想」を策定

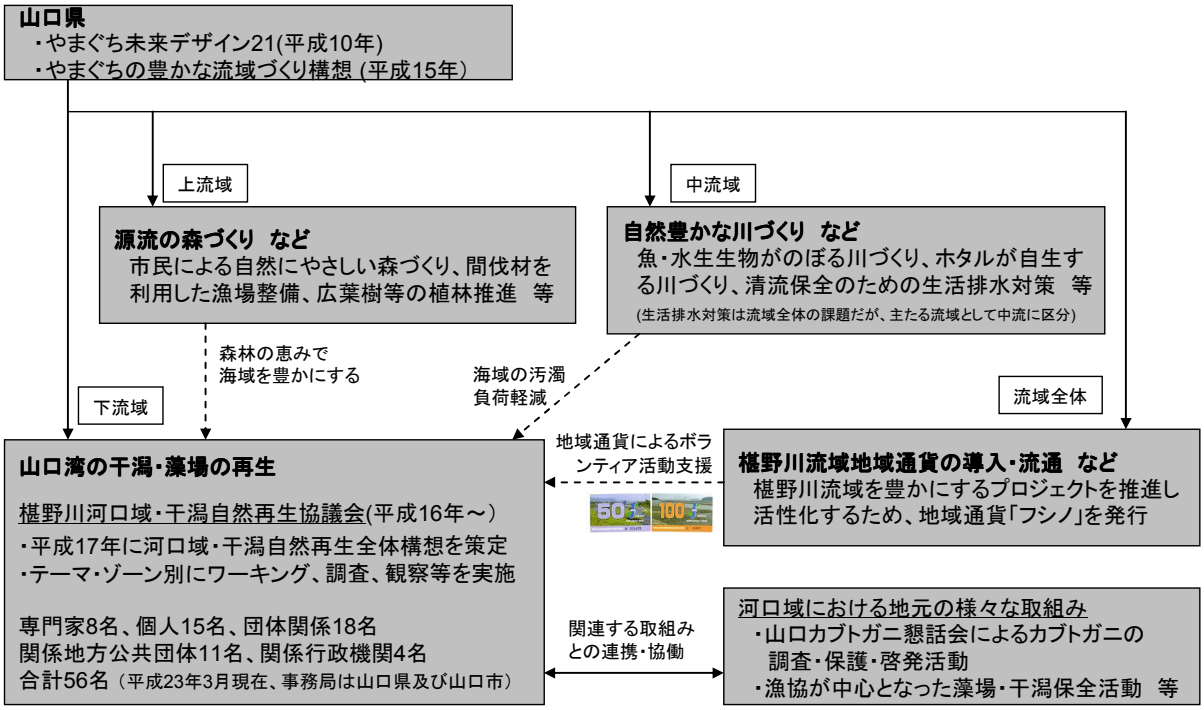
県庁内の若手職員によるワーキンググループの討議が素地となり、流域圏に係る幅広い部署の連携が実現した。また、環境省への研修経験を有する県庁の担当者により、精力的な関係部局（環境・漁政・港湾・河川）の調整や関係市町、民間団体、学識者との分担・協働が行われ、産官学民が連携・協働して地域の課題解決を目指す「やまぐち方式」が実現した。

地元漁業者の先進的な取組みが、干潟再生の鍵

地元漁協の元組合長は先進的な考えを持っており、東北地方で実施されていた漁業者による植林活動（「森は海の恋人」運動）を参考とし、平成 12 年からいち早く上流の森林組合とも協力して椹野川流域活性化交流会を作り、海のゴミ清掃や山での植樹活動などの流域を連携させた環境整備を実践してきた。漁業権が設置されている沿岸域での干潟再生等の取組みには漁業者の協力確保が重要であるが、「椹野川河口域・干潟自然再生協議会」の取組みは、漁業者の既存の交流会を発展させる性格であるため、協力関係が作りやすかった。更に、平成 21 年の 20 年ぶりのアサリの収獲が目に見える成果となり、活動の浸透に繋がっている。



図：「やまぐちの豊かな流域づくり構想」の対象となる椹野川流域（左）と構想の位置付け（右）
（出典：「やまぐちの豊かな流域づくり構想」）



図：「やまぐちの豊かな流域づくり構想」にもとづく山口湾干潟・藻場自然再生の取組み
（「やまぐちの豊かな流域づくり構想」および現地調査結果をもとに作成）